

事項	<p>おうとうの雨よけ施設内で発生する裂果は、施設内の相対湿度と土壌水分を適正に保つことで軽減可能である</p>		
ねらい	<p>おうとうの雨よけ施設内で裂果が多発する事例があるため、現地実態調査を行い雨よけ被覆後の環境条件について検討した結果、裂果の発生状況が明らかになり、相対湿度と土壌水分を適正に保つことで裂果軽減できることを明らかにしたので参考に供する。</p>		
指導参考内容	<p>1 雨よけ施設内での裂果の特徴は果頂部から裂果するものが多く、果実全体に及ぶ場合がある。主な要因は昼夜連続した高相対湿度(90%以上)である。また、土壌水分が多い条件(pF1.8)では、裂果の発生時期が早まるとともに、発生率、被害程度も大きくなる。</p> <p>2 雨よけ施設内での裂果軽減対策 以下の総合的な対策を講ずる。</p> <p>(1) 送風器等を設置し空気の流れをおこす。</p> <p>(2) 目合い1mmの防風ネットの設置により、湿度の上昇を遅らせ、裂果の要因になる果実表面の濡れを防ぐ。</p> <p>(3) 土壌水分を乾燥気味に保つために、pF2.3程度まではかん水を控える。</p>		
期待される効果	<p>雨よけ施設での安定生産に向けた栽培指導に役立てることができる。</p>		
利用上の注意事項	<p>雨よけ施設内の裂果は、強樹勢や着果量が少ない場合も多くなることがあるので、適正な樹勢の維持に努める。</p>		
担当部署 (担当者名)	<p>青森県農林総合研究センターりんご試験場県南果樹研究センター (久保隆、工藤秀樹)</p>	対象地域	<p>県下全域</p>
発表文献等	<p>平成14～18年度 青森県農林総合研究センターりんご試験場県南果樹研究センター試験研究成績概要集</p>		

【根拠となった主要な試験結果】



程度の大きい裂果

写真1 雨よけ施設内での裂果

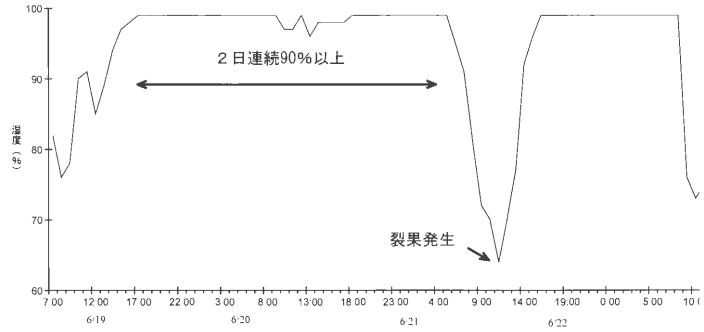


図1 裂果が発生した6月21日前後の相対湿度の推移
(平成16年 青森農林総研りんご試県南果研セ)

(注) 1 佐藤錦 /アオバザクラ コンテナ栽培13年生樹供試。

表1 雨よけ施設内における送風処理が裂果程度に及ぼす影響

(平成16年 青森農林総研りんご試県南果研セ)

区	亀裂の最大長 (個)				合計
	1mm未満	1~5mm	5mm~1.0cm	1.5cm以上	
送風処理	2	6	3	3	14
無処理	1	3	8	12	24

(注) 1 佐藤錦 /アオバザクラ 60リットルコンテナ栽培13年生供試。
2 6月8日から28日まで送風処理を行い、4樹の裂果総数で示した。
3 送風機による風速は、供試樹の位置で0.3~1.5m/sの範囲。

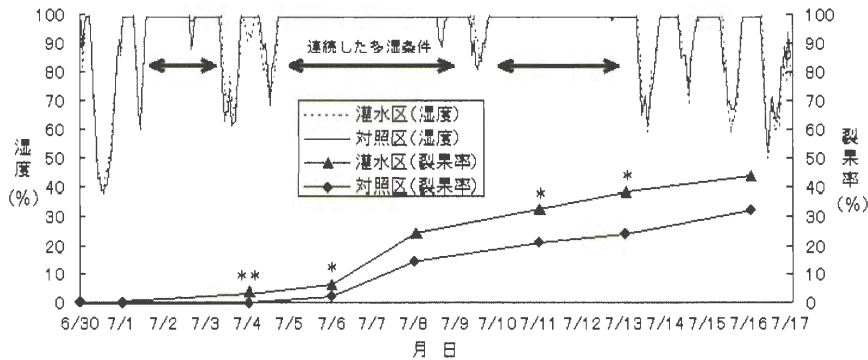


図2 相対湿度と土壌水分が裂果率に及ぼす影響

(平成17年 青森農林総研りんご試県南果研セ)

(注) 1 供試樹は、南陽/アオバザクラ、10年生
2 灌水区は、主幹から約1mの位置にかん水チューブを設置し、pF1.8程度を目安に6月30日から7月19日まで適宜かん水した。
3 対照区の土壌水分は、pF2.2~2.4で推移した。
4 図中の**は1%水準で有意差あり、*は5%水準で有意差あり。

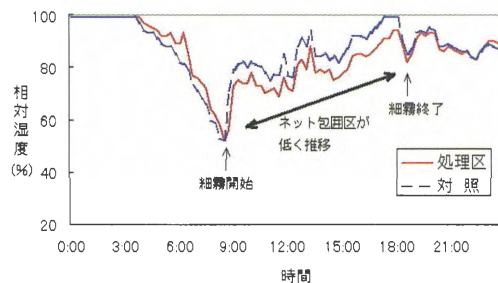


図3 高湿度処理における防風ネット (目合い1mm、白色) 内の

湿度の推移 (平成18年 青森農林総研りんご試県南果研セ)

(注) 1 ガラス室内でコンテナ栽培の佐藤錦12年生供試し、ネットで包囲する区を設け、細霧ノズルと換気扇を稼働させ相対湿度を高く保った。